

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20330111

研究課題名（和文） 日本社会「劣化」の言説分析：言説の布置・展開およびその特徴と背景に関する研究

研究課題名（英文） The Discourse Analysis of “Degradation” of Japan and Japanese: Study of process and alignment of media discourse

研究代表者

是永 論 (KORENAGA RON)

立教大学・社会学部・教授

研究者番号：50275468

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本社会および日本人に関して、「劣化」という表現が言説上について頻繁に使用されているという状況を踏まえ、メディア言説上における劣化表現のありようを解明するために、活字メディアを中心に内容分析を行ったほか、一般のメディアの受け手に対する質問紙およびインタビュー調査から得られたデータの分析結果から、言説どうしが形成する関係と、言説が人々に消費される具体的な過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research deals with the process and alignment of media discourse about the degradation of Japanese society. We conducted both content analysis of media and survey and interview research of media audience.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2010年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総計	5,900,000	1,770,000	7,670,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：言説分析、日本社会

1. 研究開始当初の背景

(1) メディアによって構成される知識の体系が、私たちの社会認知に多大な影響を与えている一方で、1990年代以降、逆に受け手の現実感覚（漠然とした不安など）という逆のベクトルからもメディア表象が規定されている。送り手・受け手の両者が一旦シンクロすれば、両者の共犯関係によって、メディア上の言説が再生産される。

(2) 実際に流通していた言説配置と、それと相互規定を起こしている受け手サイドとの接合関係について、日本における社会変容言説は、一般生活者においてはある程度のリアリティを持って感じられている。数々のバリエーションを持つ日本社会ないしは日本人

劣化説といった言説が現出し始めたのは、1990年代以降と思われる。

(3) その特性としては以下が挙げられる。

- ① 「下流社会」「下流志向」「ファストフード化」「ファスト風土化」「希望格差」「パラサイトシングル」など、社会に関する分析的な言説＝“社会言説”が数多く生産された。
- ② そしてこれらの言説が一部の専門家の間だけではなく、市井のことばとして流通し、次々に消費された
- ③ さらに現状のネガティブ感を補強するような数々のメディア表象、あるいは対抗言説が見られている。

2. 研究の目的

(1) 劣化言説の成り立ちとその言説内容の変

遷について、一連の社会的メカニズムとの関係の中で明らかにしていく。

(2) 具体的に明らかにする事柄については下記のような点を中心に行う。

- ①劣化言説はどのような論理構造と素材によって構成されているのか。
- ②語られる媒体や状況の違いによって、言説の特徴がどのように異なるのか。
- ③若者論や、テレビやインターネットといった各種メディアによる悪影響論など、過去に現れた「劣化」的な言説との関係。
- ④他の社会（具体的には韓国）における「社会劣化」言説と比較した上での共通点、および比較によって浮かび上がる日本における特徴。
- ⑤社会言説が受け手におけるどのような社会心理を背景としながら、日常的な知と親和的に接合していったのか。それは個人のアイデンティティとどのように結びついているのか。

3. 研究の方法

(1) 新聞・雑誌記事や新書などの書籍を時系列的・網羅的に追うことで、日本社会の劣化に関する言説がどのようなものとして語られてきたのかについて、その生起状況と特徴を明らかにする。最初に記事検索データベース等で1990年以降、劣化言説がいつ位に登場し始めたのか、さらには年別の掲載状況を計測し、大まかな社会的トレンドを推測する。次に諸メディアにおける劣化に関する言説の動向を内容分析によって明らかにし、その傾向が他メディアの言説にどのように対応しているかを分析する。

(2) 以上の言説が実際に人々にどのように受容されているのかについて、言説の布置が受け手においてどのように理解されており、さらにその理解が受け手におけるメディアへの接触状況や態度をどのように規定しているのかについて、家庭訪問によるインタビュー調査とともに、全国20代から70代の1000サンプルを対象に、質問紙による計量的な把握を目的としたサーベイの結果について、自由回答を含めた分析を行った。

4. 研究成果

(1) 日本社会の「劣化」に関する雑誌記事については、1990年代以降、図のような形で定着していることが明らかとなった。



図 1.1.1 雑誌記事点数の推移 縦棒=雑誌記事、横棒=新聞記事³

内容の変遷については、次のような特徴が見いだされた。

①1990～1995年

戦後50年を節目として、問われる日本人の“歴史感覚”など。あるいは、バブル経済を境にして、「没落」に関する議論が散見された。

②1996～1999年

日本のシステム、制度そのものにかかわる劣化、疲労について。特に1997年の相次ぐ企業倒産などで、バブル経済崩壊に続き、経済に関わるものがみられた。また技術力、人材、品質の劣化が取り上げられ、国際的な競争力の低下としても問題視された。

③2000～2005年

すでに90年代から散発的な議論はあったが、学力崩壊、学力低下、学力格差などが問われた。さらには、人口減少と少子化の問題は、日本の没落問題と絡めて論じられた。また子育て問題が顕在化し、育児放棄、幼児・児童虐待といったものが取り上げられ始めた。そして「キレル子ども」や“子どもが壊れる”といった問題状況が報告された。

④2006～2007年

首相の辞任や政治的な混乱が続き、政治あるいは政治家の劣化が叫ばれた。描けぬ国家的な戦略。ホワイトカラーと中間層の崩壊、ジャーナリズム、国家、医療システムの制度疲労などが取り上げられることが多くなった。

⑤2008～2009年

「残念ながら、もはや日本は『経済は一流』と呼ばれるような状況ではなくなりました」(2008年1月18日、通常国会の経済演説で大田弘子・経済財政担当大臣の発言)によって、その反響が多数みられた。また、2007年以前のを再び取り上げるもの多数あった。

(2) 人々における劣化意識については、サーベイ調査の結果、次のような特徴が見られた。

①劣化が進んでいると思われる分野は3つあり、一つには<教育・しつけ><モラル・道徳>といった時代の価値観とともに大きく変動するもの、二つ目には<政治>、さらには<経済・労働・産業>といったものである。そして劣化は、実体験を通してという場合も多いが、それ以上にメディアなどや伝聞を通じて、理解・認識されているようである。

②<世代を超えて共通している>ところと、<世代間ギャップとなっている>ところが明確に分かれていた。

③ただし、日頃のメディア接触量の多寡そのものが劣化認識や社会状況の悪化認識に直接的に影響を与えるというわけではないことも示された。1) 社会問題に興味を持ち、実際に情報収集したことで劣化認識がもたれる、2) 劣化認識が強く持たれており、そ

れが社会の状況変化として「悪くなってきている」といった見方を強化しているといったプロセスがあると推察される。

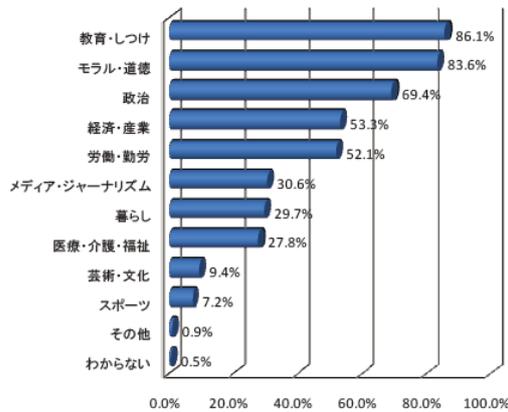


図 2.2.4 劣化・質的低下が認識されている分野 (MA)

また、自由回答を中心にした分析の結果から、劣化言説を伝えるマスメディアとしての認識だけでなく、劣化を促進するものとしてのメディア認識も散見された。また、ある劣化が他の劣化と連鎖するものとして認識されていることも明らかとなった。これについては雑誌メディアについても同様の傾向がうかがえる。また、科学言説を援用したり、何らかの専門家によって繰り返されている言説をわがものとして劣化を語る姿勢も指摘可能であった。このような連鎖と科学言説との連なりこそが劣化言説を強靱なものとしていることが検証された。

(3) 日本と韓国それぞれにおける家庭教育に関するインタビューの結果から、日本の場合は公立中学校を中心とした公教育への不信が強く、それが教育意識や選択にも大きな影響を与えているのに対して、韓国ではそういった言説は見ることが少なかった。一方で、韓国では教育格差に対して、問題としても意識が向けられているが、日本の場合は公教育と私教育の差は前提にあるとしても、それ自身が教育上の大きな問題点とされることはなかった。

社会に対する意識との関連では、日本の場合に特に劣化とされる指摘が多く見られたが、劣化への指摘が少なかった韓国と同様に、そのことを特に教育に対する動機付けとするような言説は少なかった。英語教育に対する動機付けは両国で共通した形で見られたが、韓国では将来的に外国で暮らすといったキャリア志向と結びついていたのに対して、日本の場合は教養として、社会の変化に対応できるような基礎力として語られる傾向が見られた。

以上から、教育分野における言説を資源としながら、ますます能動的に「家庭教育」に

おける不確定性のアカウントに参入を深めるという行為状況が、いわば「教育する家庭」を教育する社会」として、現代の日本社会を特徴づけていることが示唆された。

このような傾向は日本における若者論としての「ひきこもり」言説の継続的な展開についても確かめられた。

(4) 送り手に対するインタビュー調査および既存のサーベイ調査レビューの結果から、新書ブームなどにおける言説の流通戦略の過剰化の一方で、不況などを理由にしながら、それを背景に、根拠のない「劣化」をネタにし、それをあたかも既成事実のように錯覚させつつ、それが明確な根拠や事実認定に基づかないがゆえに、メディアも書き手も読み手もそれがいつまでも解決しないことに安住してしまう、ニヒリズムに陥っている可能性が示された。つまり、「日本社会の劣化」というネタが認識の上ではベタ化されながらも、問題解決という次元では再びネタとして扱われ、それがニヒリスティックに揶揄され、再びあるいは三度とメディアを賑わせる、そういう循環の中で、送り手が社会を主導する位置づけを失い、非決定的な過程のなかに身を置いている状況が明らかにされた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 浅岡隆裕、叙述という行為における ポリティクス——現代史・同時代史の叙述 という問題構成を中心に、立正大学文学部論叢、査読無、132 号、2011 発行予定
- ② 柄本三代子、リスクをめぐる認知と行為選択についての語り——情報リソースの多様性と非合理性についての考察、早稲田社会学会『社会学年誌』、査読有、51 号、2010、105-122
- ③ 浅岡隆裕、昭和の風景への／からの視線——メディアの語りの中の昭和 30 年代 - 日本マス・コミュニケーション学会『マス・コミュニケーション研究』、査読有、76 号、2010、23-41

[学会発表] (計 5 件)

- ① 池上賢・是永論・柄本三代子・浅岡隆裕「日本および日本人「劣化」というメディア言説の構築過程についての実証研究」、日本マス・コミュニケーション学会、2010 年 10 月 30 日、東京国際大学
- ② 池上賢・浅岡隆裕・柄本三代子・是永論「現代社会におけるリスク・不安意識と情報リソースの関係について(1) ——メディア接触と世代によるリスク意識の構成」グ

ループ・インタビューを中心に」、第 81 回
日本社会学会大会、2008 年 11 月 23 日、
東北大学

- ③浅岡隆裕・池上賢・柄本三代子・是永論「現
代社会におけるリスク・不安意識と情報リ
ソースの関係について (2) ——情報リソ
ースへの評価・信頼意識と情報行動」、第
81 回日本社会学会大会、2008 年 11 月 23
日、東北大学
- ④柄本三代子・池上賢・浅岡隆裕・是永論「現
代社会におけるリスク・不安意識と情報リ
ソースの関係について (3) ——情報リソ
ースとの関連からみたリスク認知と態度
決定」、第 81 回日本社会学会大会、2008
年 11 月 23 日、東北大学
- ⑤是永論・池上賢・浅岡隆裕・柄本三代子「現
代社会におけるリスク・不安意識と情報リ
ソースの関係について (4) ——つながり
はリスク・不安意識を軽くするのか?」、
第 81 回日本社会学会大会、2008 年 11 月
23 日、東北大学

[図書] (計 2 件)

- ①柄本三代子、学文社、『リスクと日常生活』、
2010、116
- ②是永論、他、ぎょうせい、安全・安心の環
境づくり——地域で守る・自分で守る、
2008、193-212

6. 研究組織

(1) 研究代表者

是永 論 (KORENAGA RON)
立教大学・社会学部・教授
研究者番号：50275468

(2) 研究分担者

浅岡 隆裕 (ASAOKA TAKAHIRO)
立正大学・文学部・准教授
研究者番号：10350290

柄本 三代子 (ENOMOTO MIYOKO)
東京国際大学・人間社会学部・講師
研究者番号：90406364

金 相美 (KIM SANGMI)
名古屋大学大学院・国際言語文化研究科・
准教授
研究者番号：10401241

岡田 章子 (OKADA AKIKO)
東海大学・文学部・准教授
研究者番号：80548008

清水 真 (SHIMIZU MAKOTO)
昭和女子大学・人間社会学部・講師
研究者番号：30386445

(3) 連携研究者

なし

研究協力者

酒井 信一郎
東京栄養食糧専門学校・非常勤講師

重吉 知美
立教大学大学院・社会学研究科後期課程

池上 賢
立教大学大学院・社会学研究科後期課程

加藤 倫子
立教大学大学院・社会学研究科後期課程

以上